

長沢鼎と伊地知家

森 孝 晴

1. 長沢の実家磯長家

長沢鼎（1852-1934）は幕末の嘉永5年に鹿児島城下で磯長家の四男として生まれている。本名は磯長彦輔である。長沢鼎という名は1865年に薩摩藩英国留学生として鹿児島を旅立つ際に藩主島津忠義から授けられた名前、つまり「変名」だ。鎖国がまだ終わっていない時期の渡英であったからいわば大きな違法行為だったのでそういう配慮があったということと、藩主から名前をもらうということの重さを留学生たちに自覚させようとしたとも思われる。

長沢の長兄は吉輔で、この長兄の家系が現在の磯長家の本家である。一方、あとで詳しく触れることだが、カリフォルニア在住の長沢の子孫の家系の本家が伊地知家である。長沢の名字が残っていないのは、これが一代限りの変名で、しかも長沢が結婚しなかったのが理由である。長沢の弟（五男）の弥之助は赤星家の養子となり同家を繁栄させたが、生涯にわたって赤星家と長沢は親しく交流した。

全身が弱ってきた晩年の長沢は禁酒法の影響で収入が減って、1927年から1933年にかけて資産の一部を抵当に入れて5、6回にわたり借り入れをしたり、賃料を稼ぐために農場の一角を他の会社に貸したりしなければならぬような窮状に陥る。この時援助の手を差し伸べたのが、弟弥之助の長男赤星鉄馬だったのだ。

弥之助は港湾建設によって建設業で財を成した人だが、鉄馬もまた父親の集めた骨董品を売り払ったりしてかなりの資力を誇っていた、1930年に78歳の長沢は、鉄馬からやむを得ず2500ドルを借り入れ、79歳の翌年にも1000ドルを借り入れている。これら3500ドルの借り入れについては、長沢の生前にはついに返すことはかなわなかった。ただし、この負債は、死後の1935年には遺産によってすべて返済されている。

ところで、不思議な縁であるが、この赤星家の末裔の赤星映司氏は現在カリフォルニアでワインメーカーをしている。

長沢の兄弟で長沢の理解にとって重要なのは、磯長家の長女のトキ（トクとの記載も見られる）と二女モリである。なぜかという、この二人の姉の3人の息子たちが渡米して長沢を助け、うち一人の家系が本家筋となったからだ。長沢の父は磯長孫四郎、母はフミである。

2. 伊地知家

伊地知家は、島津家家臣団の中で小番名家とされる上級武士の家系で、城下士である。遠くは桓武天皇から続くとされ、前半の島津家の家老なども務めた。現在でも県下に伊地知姓はかなり多い。

キーワード：長沢鼎，磯長家，伊地知家

また、伊地知家には大きな功績を残した人物も複数存在する。

まず、15世紀には、伊地知重貞しげさだという人がいる。重貞は、桂庵玄樹（日本における朱子学の基礎固めに貢献した儒家）が1478年に来薩した際に玄樹を助けた。つまり、朱子学の根本書とみなされた『大学』を玄樹が桂樹院で自ら版行した時に重貞が力を貸したというわけだ。このテキストは、『伊地知版大学』と呼ばれることもあり、『大学』の朱子学による最初の解釈書として高く評価されているようだ。

18世紀から19世紀にかけては、伊地知季安すえやす（1782-1867）という学者がいる。鹿児島県の歴史研究の根本史料として著名で全国的にも評価の高い『薩藩旧記雑録』（重要文化財）の生みの親である。季安は城下士伊勢貞休の次男として生まれ、1801年に伊地知家に婿養子に入り、伊地知季伴の跡を継いだ。季彬、小十郎、季安（1824～）と名を変えた季安は、幼いころから歴史に興味を持ち、10代のころから記録所に入出入りし、実祖父の記録奉行本田親福と息子の親孚ぎわに歴史学の手ほどきを受けていたという。享和3年には横目助に任じられ、「御歴代歌註解」を著した。

しかしこの後季安は、1808年に島津家のお家騒動に巻きこまれ、1809年に騒動の首謀者秩父季保（季安の伊地知家の本家筋にあたる。切腹させられた。）に関わりが深いとみなされ、免職の上喜界島遠島の処分を受けた。その後1812年に鹿児島に戻り閉門も解かれた季安は、このあと不遇の時代に入ることになるが、史実考証や古文書の収集に没頭し、次第に在野の篤学者として注目されるようになって、次々と著述をまとめていった。

1847年、66歳の時に、島津斉興なりおき・斉彬親子の目に留まり、再任官を許された。その後は、1848年には記録方添役に、1852年には斉彬から記録奉行に任じられ歴史考証などに尽くした。1867年に86歳で死去しているが、こつこつと収集・編纂し続けていた『薩藩旧記雑録』は、季安亡き後息子の季通に引き継がれ、1901年ころまで延々と増補され、ようやく大成した。

19世紀には、薩摩きっての軍師と言われる伊地知正治しょうじ（1828-1886）がいた。正治は薬丸自顕流の達人で、軍奉行として活躍した。西郷隆盛とは幼馴染で、西郷が軍事を相談した軍師であった。正治の高祖父は南さつま市の漢方医で、祖父（川添）英吉は戊辰戦争の軍医高木兼寛が創設した慈恵会講習所を卒業している。高木は英吉の戊辰戦争時の戦友で、西郷は西南戦争時に川添家に宿泊したそうである。

実は、2019年4月に西郷から伊地知正治に宛てた書簡が発見された。1874年3月のものと思われるこの書簡は、1873年12月に正治から西郷に届いた手紙（正治が西郷に指示されて朝鮮について調べた内容の報告）の返事と思われるが、そこには「征韓論」という言葉が見られる。

正治は薩摩志士の一人にも数えられ、合伝流兵学の奥義を極めた人物で、西郷従道や三島通庸らはその門人であった。軍師として西郷隆盛が最も信頼していた人物である。

西南戦争時に初めは西郷軍を支援したがのちには官軍に協力した伊地知嘉兵衛という人物もいる。北薩伊佐市（旧菱刈太良郷）の戸長（町長のようなもの）を務めた。

3. 伊地知家と長沢鼎の深いつながり

伊地知家と長沢のつながりは、磯長家の次女モリから始まる。モリは長沢（四男彦輔）のすぐ上の姉コマ（三女）の上の姉（二女）である。モリは、夫との死別などがあって2度にわたり

結婚していて、最初の夫が伊地知季雅であった。そしてこの季雅とモリの二男が、のちに甥の中で最も早く長沢を慕ってカリフォルニア州サンタローザにやってきて長沢の家族となる伊地知共喜である。現在のカリフォルニア側の本家の始まりとなった人物だ。すでに触れたことだが、伊地知家は学者の家系で、一方磯長家も歴学者の家系であるので、このあたりがモリが伊地知家に嫁した主な理由であったと思われる。

ところで、伊地知季雅は伊地知家の家系のどのあたりに位置するのだろうか？ 伊地知家の家系図には「季」の字のつく名前が沢山散見されるが、「季雅」の名は一人しか出てこない。それは城下士「伊地知藤左衛門家」の中にある。季雅は、伊地知家本家7代季豊（島津家9代藩主忠国の家老）の分家筋にあたる。ちなみに、すでに触れた季安（学者として名高い）やその父季伴や跡継ぎの末通は季豊の父の分家筋（伊地知季安家）にあたる。季雅の父は季賢という。また、季雅には藤八という長男がいたようだ（共喜は二男）が、その後の家系は不明である。

モリとその再婚相手の佐々木権之助の間には六男の英吉がいるが、この長沢の甥は共喜に遅れること6年後にファウンテングローブに加わり、長沢を助けた。ちなみに、本家筋の甥の磯長紀一も1916年に渡米し、長沢のワイナリーに加わっている。磯長本家についてはまた稿を改めて考察してみたいが、長沢と姉のモリがいかに親しかったかが、2人の息子が長沢を助け、特に伊地知共喜はアメリカ長沢家ともいべき家系を作り上げその末裔が今でも同家を守っていることを見れば、よくわかるのである。

長沢は磯長家を離れ、幼くして海外に渡り、完全に帰国することはついになかった。しかし、今でも長沢が故郷を捨て日本を捨てたと解釈する向きもある中で、磯長家の人々は、アメリカ・カリフォルニアにいる長沢を皆で支えたのである。伊地知家は言うまでもなく、佐々木家や、本家筋の人間や弟の養子先の赤星家まで大きな援助をしたのである。また、モリのすぐ上の姉のトキ（トク）の二男本田幸介もよき農業研究者仲間となり、また同志となったのだ。ちなみに、幸介は農業研究や指導で大物となり、大久保利通の妹の末娘貞と結婚したのである。

参考文献

- 犬塚孝明 (1974). 『薩摩藩英国留学生』 東京：中公新書。
 ——— (2013). 「長沢—祖国近代化のはざままで—」『新薩摩学 知られざる近代の諸相変革期の人々』 鹿児島：南方新社。
- Japanese American Curriculum Project, Inc. (1985). *Japanese American Journey The Story of A People* San Mateo, California: JACP, Inc.
- 原口泉 (2019). 『薩摩藩と明治維新』 鹿児島：志学館大学出版会。
- 門田明 (1991). 『若き薩摩の群像』 鹿児島：春苑堂かごしま文庫1。
- 門田明, テリー・ジョーンズ (1983). 『カリフォルニアの士魂—薩摩留学生・長沢鼎小伝』 東京：本邦書籍。
- Kadota, Paul Akira and Terry Earl Jones (1990). *Kanae Nagasawa—A Biography of a Satsuma Student—* Kagoshima : Kagoshima Prefectural Junior College.
- 上坂昇 (2017). 『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎—宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』 東京：明石書店。
- 「九州の王様たち その軌跡」『九州王国』 2021年5月号。 鹿児島：エー・アール・ティー株式会社。
- LeBaron, Gaye & Bart Casey (2018). *The Wonder Seekers of Fountaingrove*. Historia II Publication.
- 三木靖, 向山勝貞 [編] (2003). 『街道の日本史54 薩摩と出水街道』 東京：吉川弘文館。

- 宮下亮善 (編) (2009). 『西郷 (せご) どんと薩摩士風』 鹿児島：西郷隆盛公奉賛会.
- 森孝晴 (1998). 『椋鳩十とジャック・ロンドン』 鹿児島：高城書房.
- (2014). 『ジャック・ロンドンと鹿児島—その相互の影響関係』 鹿児島：高城書房.
- (2018). 『長沢鼎 武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー』 鹿児島：高城書房.
- (2020). 「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告17』 鹿児島：鹿児島国際大学ミュージアム.
- (2021). 「ワイン王とポテト王—長沢鼎と牛島謹爾」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』 第22巻, 第2号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
- 森孝晴, 三木靖 (2016). 『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」—』 (平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子) 鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学.
- 長沢鼎 (1871). 『長沢鼎日記』 串木野：串木野市役所保管.
- (1980, 1994, 1997, 1998). 『長沢鼎日記』の翻刻『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』 第9号 (1980年), 第23号 (1994年), 第26号 (1997年), 第27号 (1998年).
- 長沢鼎常設展示室兼資料室所蔵資料 (鹿児島国際大学内, 約400点)
- 新渡戸稲造 (1993). 奈良本辰也 (訳). 『武士道』 東京：三笠書房知的生きかた文庫.
- (2009). 奈良本辰也 (訳). 『英語と日本語で読む「武士道」』 東京：三笠書房知的生きかた文庫. 原著は1900年に出版.
- Nitobe, Inazo(2007). *Bushido The Soul of Japan*. Tokyo: IBC Publishing, Inc.
- 野田幸敬 [編著] (2019). 『系図研究資料 島津家家臣団系図集 上巻 各家各氏一族分出略系図』 鹿児島：南方新社.
- 多胡吉郎 (2012). 『海を越え, 地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』 東京：現代書館.
- 鷲津尺魔 (1933). 『長沢鼎翁伝』: 鹿児島国際大学蔵.
- 渡辺正清 (2013). 『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』. 鹿児島：南日本新聞開発センター.